

救護第7班 3月16日～3月22日 医師・藤崎 修



救護班として初めて、避難所の巡回診療に出ました。だれも入っていないところへ行くのだから、診察に重きを置いていたわけではなく、現状確認と状況の把握も目的でした。訪問する避難所には事前に連絡し、時間と診察人数をある程度決めて入りました。避難所では体育館や公民館に被災者が雑魚寝しているような状況で、動けない患者さんのときは被災者が生活するの中に入って行って診察しました。



巡回診療は日が暮れる前には病院へ戻りました。気候はまだ冬で、夜間は道路が凍結しました。他の救護班が帰れなくなって翌日帰ってきたこともあり、暗くなる前に帰ってくるよう指導されていました。また道路は破損状況が不明で、瓦礫で通れないところもあり、ナビも役には立ちません。携帯電話も通じず、衛星電話しかつながりませんでした。

特殊医療救護車両(ディザスター)が入っていける避難所はなかなか見つかりませんでしたが、展開できたときは2系統の診察に分け、ディザスターは外傷の患者に対応しました。避難所によっては幾つも部屋があり、救護班員が1人ずつ入っていったこともありましたが、安全面で問題があり、出来るだけ診療スペースにきってもらうようにしました。

被災地は、道路に船があつたりビルの上にバスがあつたり、建物だったところに土台だけが残っていたり。全体としてシーンとしていて、子どもの日記や写真など、人の生活の跡がそこらへんに転がっている。言葉も出ないような状況でした。道路は、場所によっては瓦礫を撤去して整備されていました。